



ビオトープ・ニュース092

発行日 2016/08/07

発行：日本ビオトープ管理士会 徳島支部
 事務局：徳島市山城町東傍示 5-281 新弘測量設計㈱内
 事務局長：東條芳顕 TEL：088-622-5688

■ビオトープ・サロン 生物多様性保全 ～多様な主体で取り組む生物多様性主流化～

COP10 以来、生物多様性主流化に向けた取組が推進されていますが、目立った効果を得るのは難しい社会情勢です。まずは、経済成長、エネルギー、国土強靱化、安心安全と、キーワードが並びます。

低炭素社会、循環型社会、自然共生社会、これらが実現した持続可能社会を目指して久しいですが、経済成長優先は避けられないのが現状で、マネー経済を支える大量消費社会は未だ健在のようです。

こうした中で、市民レベルでは地道な活動も。「継続は力なり！」に希望をつなぎましょう。(編集局)



【建設会社で外来種対策と生態的配慮の研修会】

去る6月11日、株式会社北岡組が主催する研修会を支援しました。吉野川の堤防や高水敷の維持管理にあたり、現場担当職員の教育訓練として、**外来種対策**とともに**生態的配慮**について学ぶ講座です。

皆さん熱心に取り組み、「今後の堤防維持工事・堤防築造工事にも役立てたい。」とのことでした。

外来種対策については、国交省河川管理課や四国地方整備局河川管理課から**手引きや対策案が公開**されています。ネットでPDFがダウンロードできますので、以下のキーワードで検索して下さい。

- ・河川における外来植物対策の手引き 国交省
- ・四国地方整備局管内外来種対策(案) 四国地整
- ・四国地整管内の外来植物ポケットブック 四国地整

草刈については、刈り草の持ち帰りが定着していますが、特定外来種が拡大する中で、種子が混在した場合の拡散防止が今後の課題ですね。



一方、生態的配慮については、**生息環境の特性と命のつながり**を理解することが大切です。上流域、中流域、下流域、河口域は、それぞれに環境が多様で、そこに暮らす生きものは異なり、それぞれの**環境に適合**して系を成し、多様性を支えています。

冬枯れの草原に群れて訪れるカワラヒワ、砂礫の川原にはコチドリ、岸辺の葦原にはオオヨシキリ、高水敷の草原にはヒバリ、オギやススキの菅原にはカヤネズミが、彼らを求めて開けた土手や草原はサシバやノスリの狩場となっています。

彼らをつなぐのは命、それをたどればチョウやバッタ、そして、**草にたどり着きます。**

キリギリスなどの緑色の体色のバッタは、草丈の高い草地に生息し、緑色の葉の上で暮らし、体色が茶色や黒色のコオロギなどは、草丈の低い草原の地面で茶色の枯草の上や下で暮らしています。

草は一度にすべてを刈り取らず、①**刈り残し区間**を計画的に設定して、その場所は回ごとに変える工夫、②広い高水敷きはまとまりのある面積の草地を**点在**させ河岸や河畔林の林縁は**带状**に、③長い距離のある堤防は可能であれば**モザイク状**に刈り残す。

河川管理の草刈は、必ずしも美しく刈り揃える必要はないはず。むしろ、不揃いなのが自然に近くて**川の景色にふさわしい**。刈り残し区間は、刈り取り作業区間から逃げ出した生きものたちの**一時避難場所**になります。管理区間の環境特性を把握し、その環境ごとに草地タイプを定めそれを目標に草刈方法(**実施時期や強度・頻度**)を計画的に定めることが望まれます。まずは**発注者の意識改革**から。



ビオトープ・サロン お便りコーナー

前号の091【ビオトープ気述の里で総合学習】へのお便りをいただきました。 (編集局)

【Iさん】160711

学校内の人事異動にも負けずに、8年も継続しているのはすごいと思います。しかも小学校全学年にプログラムが用意されているなんて、素晴らしいです。

人が重要というのはそうだと思いますが、他にも必要なものがあると思いました。ビオトープ管理士の応援もそのうちの一つになるのではないのでしょうか。

現在、総合学習の時間の扱われ方はどうなのでしょう。「平和教育や人権教育が優先なのだろうか?」と思って調べたら、事例に「身近な自然」が載っていて少しホッとしました。

■http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/064/siryu/_icsFiles/afieldfile/2015/11/25/1364627_2.pdf

■http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/sougou/syokatsu.htm

【Yさん】160711

気延の里 サイコー!! もう8年にもなるとは、本当に皆さんの努力たるや敬服いたします。小学校全学年をカリキュラムに入れるなんてすばらしいです。また、行きたくなりました。

いつもニュースのお便りありがとうございます。

■みんなの“たからもの”

「食う、食われる。」の関係が生態系のバランスを保つ



タカアシグモですね。どちらも嫌われ者ですが、私たちの生活の場でも野生のドラマが展開されているようです。キンチョールよりも多様なクモが暮らしやすい環境を…ちょっと無理!…かな? 種の多様性が生態系を支えます。(編集局)

【ゴキブリを食らうでかいクモ:160714 Kさん】

シャッターチャンスに恵まれました。逃げないのでどうしたのかと、よく見ると何かを食っている。何とゴキブリでした。ゴキブリを食べつくしてくれると良いのですが、クモだらけになるのも困るし、「痛し痒し」といったところでしょうか?

■ビオトープ・セミナー 資格試験に挑戦して基礎知識を修得しよう!

ビオトープ管理士資格試験過去問題 出展:(財)日本生態系協会主催「ビオトープ管理士セミナー」のテキストより
無断転載禁止:本紙は公益財団法人日本生態系協会の許可を得て転載しています。(編集局)

【ビオトープ論の択一問題:正答と解説は次号で紹介】

問092:植物の種子散布について述べた次の文のうち、誤っているのはどれですか。

1. イタヤカエデの種子は、翼果といってプロペラの羽のような形をしており、落下の際にヘリコプターのように回転することによって遠くに散布される。このような種子散布を「風散布」という。
2. クロガネモチの果実は、鳥に食べられ、種子だけが消化管を通してフンとともに排出されることによって遠くまで運ばれる。このような種子散布様式を「被食鳥散布」という。
3. カケスは、ミズナラのドングリを枯葉の下などに貯蔵する習性があり、貯蔵されたどんぐりの一部は食べられずに残り、発芽定着する。このような種子散布様式を「貯食散布」という。
4. カンアオイの種子には、エライオソームと呼ばれるありを誘引する付属体があり、エライオソームを食べるアリによって遠くに運ばれる。このような種子散布様式を「アリ散布」という。
5. タネツケバナの果実には逆毛の付いたトゲがあり、このトゲで動物の体に付着することによって遠くに運ばれる。このような種子散布様式を「動物付着散布」という。

■前号091(生態学の択一問題)の正答[2]

自然界には、分子レベル、細胞レベル、個体レベルというように様々なまとまりの系がある。ある空間内に生息する同種個体の集まりを(個体群)と言います。そして、ある空間内に生息する様々な種の(個体群)の集まりを(群集)と言います。

2級はどなたでも受験でき、四国の受験会場は「徳島大学工学部」です。自然環境の保全に関わる方には、是非とも取得していただきたい資格です。詳しくは、<http://www.ecosys.or.jp/> (公益財団法人 日本生態系協会HP)

■編集後記

ビオトープに関するお役立ち情報のもとより、皆様の生活や活動やお仕事等、日常を通じて見たり感じたりしたこと、身近な自然の春夏秋冬や喜怒哀楽のご寄稿をお待ちしております。ふるってご参加ください! 編集局【ご意見・お問い合わせはE-mail:kanv@nifty.comへ】【バックナンバーはURL:<http://biotopetokushima.yu-yake.com>から】